

PIAZZA

世界教養の知のひろばへ

ピアッツァ
2023 vol.8

特集

長編小説と出会う



名古屋外国語大学出版会

特集 長編小説と出会う

目次

ようこそ、広場へ ビブレッツァ ◎大岩 昌子 02

特集
長編小説と出会う 05

特集インタビュー

何にでもなれる自分を見つけよう ◎平野 啓一郎

未知の世界への扉 ◎木村 茂雄

豊かな時間を味わう ◎新居 明子

「事実」と「小説」のあいだで ◎小堀 慎悟

世界のたより 16

「好き」を追う ◎小黒 江利果

複言語の世界 18

コーンウォール語

Kernowek ◎Philip Rush

ロシア語

ロシア語を通して触れることのできる世界 ◎齋須 直人

学長だより
EW+の誕生 ◎亀山 郁夫 26

出版会編集委員コラム
本をめぐる10の質問 28

◎吉見 かおる 原 慎之介 石田 聖子

特別エッセイ

私の外国語遍歴 ◎村上 文 31

レポートの書き方 ⑧

「学期末レポートの書き方(6)」◎真田 郷史 32

キャンパス通信
NUFS & NUAS 読書コメント大賞 36

出版会から

『魔の山』◎金関 ふき子 41

図書館より 42

また会いましょう 46

ようこそ、広場へ

大岩 昌子

名古屋外国語大学出版会・編集長

最近、Atelier Parfum de fleurs という香水作りの講座に誘われた。香水は身近なものではないので、非日常を味わいたくなつて参加することにした。香水には悠久の歴史がある。大プリニウスの『博物誌』にもあるように、香料はすでに古代ローマで利用されていた。初めて歴史に登場するのは、紀元前三〇〇〇年頃のメソポタミア文明の時代。香りのでる樹木を燃やして死者を埋葬したり、煙と香りを神々に捧げて疫病や悪魔祓いをする焚香（ふんこう）に、そのはじまりが認められる。香水を意味する perfume が、ラテン語の per fumum（煙によつて）を語源とすることが腑に落ちる。

さて、香水作りの講座では、各受講生の前に香水用の可憐な小瓶が準備され、あたりはもう優しい花の香りに満たされていた。スズラン、ユリ、パンジー、チューリップといった花のエキスを自由に組み合わせ、自分だけのオリジナル香水を作るという趣向。香りのなかでふと、香水の都と呼ばれる南仏の小さな街、格拉斯を訪ねたときの記憶がよみがえつてきた。ちょうど、あの世界的大ベストセラー、『香水——ある人殺しの物語』に戦慄を覚えた頃のことだ。山中を揺られたバスから街に

降り立った瞬間、風に乗った色とりどりの香りが私を迎えてくれた……
我に返ると、受講生の皆さんが楽しみに、花のエキスをスポイトに吸い込み、自分の小瓶の中で思い思いの調合を始めている。香りの記憶、想像、そして創造。講座の先生による最後の一言が印象的だった。「ぜひ身近にある自然の中の香りを感じてほしい。」非日常を味わおうと参加した講座だったが、穏やかでかけがえのない、忘れがちな日常を感じさせてくれるひとときとなった。

ここで、出版会について紹介しておこう。日頃の活動としては、英語や世界教養プログラムなどの授業で使用される教科書や、一般読者に向けて書店にも並ぶ書籍を製作している。皆さんのような若い読者に届くような作品作りが、われわれのコンセプトだ。また、さまざまなイベントに関わることも多い。ただいま、ワールドリベラルアーツセンターとの共催プロジェクト「長編小説に挑む！」が進行中。今号のPiazzaの特集でもある。学生時代に一つの作品でもよいので、長編小説を読破してほしい、そんな願いから企画された。理由はたくさんあるが、まずあげるとすれば、読めば必ずその後の人生が大きく変わるからである。さらに「読書コメント大賞」を大学図書館と共催したり、学外のイベントなども行ったりしている。大切なのは、他者と思いを共有、あるいは批評すること。また読書によって変化した自分自身を意識すること、だろうか。十月には「読書コメント大賞」の募集が始まるので、積極的に応募してもらえたら嬉しい。

ところで、この冊子のタイトル Piazza は、イタリア語で「広場」を意味する。大学は、さまざまな世代・国籍の集団であり、大いなる交流の場である。皆さんは確実にその一員として迎えられている。不透明な時代だからこそ思いのままに、この広場の仲間として、自由に生き生きと、大学生活を送ってほしい。

あらためて、ようこそ、Piazza へ。

おいわしように

外国語学部・フランス語学科

特集

長編小説と出会う



何にでもなれる自分を見つけよう



特集インタビュー

平野啓一郎

構成・大岩昌子 川端博

はじめて小説を書いたのは、高校生のときです。四百字詰め原稿用紙で八十枚。今から考えるとたいした分量ではありませんが、当時は大長編のつもりでした。作家になりたいと思っていたわけではなく、ただ書いてみたかったから書いたのです。だから、そのころの小説はこれ一つだけです。

小学校時代、本はあまり好きではありませんでした。むしろ、外で何かスポーツなどして遊んでいたものです。でも十四歳のとき、ある小説に出会いました。三島由紀夫の『金閣寺』です。この本には、激しく打たれました。父が早くに亡くなっていることもあって、子供のころからいつのまにか「死」というものを意識するようになっていたのでしょうね。「死」はいきなり訪れる、そのことが生命観に大きな影響を与えていたと思います。

そんな自分と、『金閣寺』の主人公が重なっていきました。しかもその彼は社会から疎外された存在として、懸命に生き方を模索している。こんなふうに、自らが置かれている根源的な生き方、実存的状況と接点がある作品に出合えたことは、本当に幸せでした。今でも、三島という作家には惹かれ続けています。

こうして文学に親しむようになり、日本の作家、海外の作品を問わず、たくさん読んでいきま

した。しかし、大学は法学部に進学。正直、法律の勉強にはあまり興味が持てなかったなかで、政治系の勉強は魅力的で、とくに政治思想史はとても面白いと思いました。そこですばらしい恩師にも出会い、多くのことを学び、考えることができました。小説を書くときにも役立っているのが、この時の勉強です。安保法制とか、世界のさまざまな紛争など、社会的・世界的な問題にコミットしてきましたが、こうした大学での社会科学系の学びのおかげでもあります。

在学中、京都にはまだ遊ぶ場所も少なく、大学時代には読書という安価な趣味が中心になりました。文庫は安かったのでよく読んだし、図書館も大いに利用したものです。それらの体験から、作家になりたいという気持ちが育っていきました。そして、在学中に書いた小説『日蝕』で、芥川賞をいただくことができました。

政治と文学を学んだ大学時代

小説はさまざまなスタイルで書かれています。自分では、登場人物たちのキャラクターで物語を動かす手法は避けるようにしてきました。主人公の造形だけで作品を作ると、どうしても「自己責任論」にからめとられてしまうからです。当時も今も、たびたび主張される自己責任論に、ぼくは大きな反発を感じつつづけています。なんでもかんでも「お前自身が悪いからそうなるのだ」という発想ですね。

大学時代に手に取った本は、政治思想史系統のものばかりではありません。むしろしだいに、外国文学にふれる機会が多くなりました。フランス語がもともと好きで、第二外国語として大学でも学び、フランスの作家の作品をたくさん読みました。ボードレールやランボーなどの詩も、翻訳やなれない原文に挑戦したり。翻訳は、鈴木信太郎の『悪の華』、福田恆存のシェイクスピアなど、大家たちの手になるものが多かったと思います。日本の近代文学の、いくらか古くて装飾的な言葉遣いが魅力的でした。

現代では優れた古典的な作品に、数多くの翻訳が出ています。詩はもちろん、ドストエフスキー、

トーマス・マンなどの名作に、いったい何種類の翻訳があるでしょう。翻訳は原文と雰囲気が違うように感じられることもあります。でも翻訳であろうとなかろうと、たくさんのお優れた作品を読むことに大きな意味があります。それに、翻訳家の工夫しだいで多くのことが伝わってくる、そのことがまた文学の魅力なのです。

たとえば、ぼくは以前、オスカー・ワイルドの『サロメ』を翻訳しました（光文社古典新訳文庫）が、そのとき心掛けたことがあります。これまでの多くの訳では、サロメは妖婦、悪女のように訳されてきました。

しかし、原文では十七歳の少女という設定です。ですから自分としては、そんな少女の無垢であることの残酷さを意識して訳してみたいつもりです。もちろん、かつての大家たちの「彫心鏤骨」の翻訳にはノスタルジーがあります。それでも、現代の新しい翻訳作品もぜひ手に取ってほしいと思っています。

大長編に挑んでみたい！

文学は世界を広げ、自分を探る手掛かりにもなりますし、さまざまな人生の可能性を提示してくれるものです。高校時代は受験で忙しいですが、大学に入ったらそのときしか読めない長編・大長編にぜひ挑戦してほしいと思います。大学時代は、比較的ゆつくり時間が流れます。読書で退屈するのも、人生のいい体験です。ぼくも、トーマス・マンの『魔の山』や『ブッデンブルーク家の人々』、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』などの長編を読んだのは大学時代でした。それに、たとえば周りの人間たちが退屈だと思ったら、ぜひドストエフスキーを読んでみましょう。暗く激しく、まがまがしい人物や、奇人変人が大活躍。若者の心もきつととらえてくれます。

就職すると長い自由時間が作りにくくなって、読書に挑戦することをあきらめてしまいがちです。大人になれば傲慢になる、そんなこともありますね。読んでおいたほうがいいもの、なかなか手が出せないものに、若いうちに挑戦するのがいいと思います。若者は知的好奇心が旺盛で、素直

で、わからなくても読む、そこに大きな意味があると考えています。

海外での経験も貴重です。ぼくは自分の意欲のほかに、大学で学んだ政治思想史、フランス語、世界の文学などのおかげもあって、小説家になることができました。「文化交流使」の制度でパリに一年間滞在、ヨーロッパのあちこちを回ったこともあります。フランスだけでなく、スウェーデン、ハンガリー、スペイン、オランダ、イタリア等を訪れ、大学などで講演し、さまざまな人たちと語り合えた、たいへん充実した一年でした。

もちろん、学生時代に訪れる外国は、お金はなくても、それ自体が自由でのびのびとした冒険で、貴重な体験になります。そんなときは、行った先の社会に適応し（郷に入れば郷にしたがえ）、考え方・文化などをひとまず受容しながら、最終的には自分で考えて、ちがう自分を発見することを楽しみにしてほしいと思います。

自分はこんなものだと決めつけず、多くの自分になれる可能性をさぐってほしいのです。当たり前ですが、よく遊びよく学ぶ、それが大事です。いろいろトライし、自分に向く・向かないを探す。つらい作業ですが、みんな同じです。

自分の「アイデンティティ」なるものが、一つの仕事だけで決定すると思っではいけません。人生は、本当にさまざまな可能性にあふれています。いろいろなことをやっている自分がトータルで自分なのだ、そう考えてみてはいかがでしょう。

（名古屋外大出版会刊行『アフターハイスクール』より転載）

profile

平野啓一郎（ひらのけいいちろう）

小説家。一九七五年生。京都大学法学部在学中に執筆した小説『日蝕』が、第百二十回芥川賞を受賞する。作品は『葬送』『マチネの終わりに』『ある男』など。エッセイ『私とは何か「個人」から「分人」へ』。最新小説は『本心』。二〇一三年に『三島由紀夫論』を上梓。なお蒲郡市の『海辺の文学記念館』には、同市生まれの平野さんによる作品、色紙などが展示されています。

未知の世界への扉

木村 茂雄

長編日記を読む

何十年かぶりに大学時代の日記を読み返してみた。当時の私自身の長編小説との出会いを振り返るためだ。毎日書いていたわけではなく、長いブランクもある。それでも四年分の日記を読了するのには、けっこう時間がかった。読書ノートではないので他にも色々なことが書いてある。なかでも、当時は何かにつけて感情を揺さぶられる日々が多かったことに、我ながら驚いた。いまの名古屋外大生も同じような感情の起伏を経験しているのだろうか、ふと思ったりした。

その日記のなかで作家・作品への言及があったのは四十七か所。作家名を登場順に並べるなら、トルストイ、オスカー・ワイルド、辻邦生、ドストエフスキー、ヘミングウェイ、シェイクスピア、マルセル・ブルースト、トーマス・マン、ディケンズ、ジョゼフ・コンラッド、ゴーゴリ、夏目漱石、北杜夫、安部公房、テ

オドール・シュトルム、ヴァージニア・ウルフ。

「文学少女」「文学青年」は死語か？

私は自他ともに認める「文学青年」だった。もとも当時は、同じような「文学少女」「文学青年」が周りにごろごろしていた。前から本を読むのは好きだったので、いま並べた作家の作品もいくつかはすでに読んでいたが、読書量がかなり増えたのは大学入学後、とくに大学二年のときだったようだ。四十七の言及のうち半数近くは大学二年のときで、四年次にはなんとゼロである。最終学年では英文科で卒論に取り組んだため、他の作家に出会う機会がかえって減ってしまったのだろう。

「文学少女」や「文学青年」という言葉をほとんど聞かなくなったのは、いつごろからだろうか。いまの外大生が本を読まないわけではないのは知っている。学芸大と合同の「読書コメント大賞」もあり、受賞者の文章に表された感性や思考力には私も感心させられることが多い。ただし、それでも古典的な長編小説が取り上げられることは少ないようだ。願わくは、令和の時代にも「文学少女」「文学青年」が蘇ってほしい

と思う。あるいは、蘇らせようではないか。

『失われた時を求めて』―世界を新しい目で見る―

プルーストの『失われた時を求めて』は、世界最長の小説としてギネス認定されている。一九七四年に新潮社から出版された全七巻の日本語訳を、私は大学一年のときのお年玉を投入して手に入れた。二年生になった五月二十三日の日記には「プルーストをついに読みあげる」とある。読み始めた日は定かでないが、一年と二年の間の春休みに、栃木県の茂木という田舎でこれを読んでいたことはたしかだ。春を迎える故郷の風景を、プルーストというフィルターを通して観察していたことをよく覚えているからである。

読了する二日前の日記にもこうある。東京と田舎の「自然」の印象の違いを感覚的に言い表そうとした文章だ。「きのう、今日と秋のような、空、風、光だ。それらを満喫することも、東京のおれには出来ない。昼間、青空を見上げた時も、夕方、雲と山並みのあいだを帯状に広がる澄んだあかね色を目にした時も、そうした視覚の印象のみで自分の感覚が満たされる事はなかった。東京の夕景色は、周りにツバメが飛びかい、

するどい鳴き声を残し、夕暮れの静寂に深みを与えるような、茂木の小学校の夕暮れとは、本質的に異なるものではないか」。この一節は、日記の他の文章とくらべてかなり異質である。この文章にもプルーストのフィルターがかかっていたに違いない。また、同じ日の日記に「名前も知らない jeunes filles en fleurs」という言葉もある。これは『失われた時を求めて』第二編の『花咲く乙女たちのかげに』(À l'ombre des jeunes filles en fleurs)という、一行詩のように美しい言葉の引用である。日記にある「花咲く乙女たち」とは、大学でときどき見かけた女子学生のグループのことだ。要するに、この春の私はプルーストに乗り移られ、(私なりの)プルーストを通して世界を見ていたのだ。それは新しい目で世界を見る新鮮で意味深い経験だった。そのような未知の世界への扉は、あなたのすぐそばにある。一度、その扉を開いてみてはどうだろうか。



きむら しげお
現代国際学部・現代英語学科

豊かな時間を味わう

新居 明子

時が経つのを忘れるほど没頭できるのが、長編小説ならではの魅力であり醍醐味ではないでしょうか。何日も時間をかけて読む長編小説は、通学時間などの隙間時間に一気に読み終えてしまうことのできる短編小説と比べると、描かれている世界で過ごす時間が長いため、登場人物に感情移入しやすく、一緒に泣いたり笑ったり驚いたり腹を立てたり、自分のいる現実世界とはまったく異なる世界を心ゆくまで堪能することができます。熱中するあまり眠るのがもったいなく朝方になっても読む手を止めることができない、あるいは食事をしていてもその物語世界が自分のすぐそばにあるように感じられるのは、長編小説を読んでいる時にこそ味わうことのできる不思議な感覚です。

この寝食を忘れるほど夢中になれる作品が、必ずしも自分の身近な世界を描いている必要はありません。たとえば作品の舞台が、マンモスが闊歩していた紀元前

三万年前の氷河期であっても、私たちは文字を通してその世界にいつも簡単に入りこみ、ネアンデルタール人に育てられたクロマニヨン人の少女エイラと、時空を超えて一緒に喜びや悲しみを経験することができるようです（ジーン・アウル著『大地の子エイラ』）。むしろ現実世界を描いた作品よりも、国や時代などの設定が自分とはまったく関係のない方が、「それはちよつと違う」と違和感を抱くことがないため、作品世界により深く没入できるかもしれません。

日常とかけ離れた世界を描くファンタジー小説には、J・R・R・トールキンの『指輪物語』やJ・K・ローリングの「ハリー・ポッター」シリーズのような世界的ベストセラー作品はもちろんのこと、日本人作家による作品のなかにも、上橋菜穂子の「守り人」シリーズや小野不由美の「十二国記」シリーズなど、作品の世界観にどっぷりとつかり抜け出すことが難しいほど素晴らしい長編小説がたくさんあります。特に「十二国記」シリーズは、近年ライトノベルや漫画、アニメ市場で大人気の異世界転移ものに設定が似ていることもあり、もしみなさんが長編小説に慣れていなくても、それほど抵抗なく読んでもらえるのではないかと思います。

ます。（ただし作品世界への圧倒的な没入感のために、特に第一巻『月の影影の海』の上巻は読んでいて呼吸が苦しくなるほどの場面が何度もありますので、ご注意ください。）

ところで、話が少しそれてしまっていますが、「三省堂 辞書を編む人が選ぶ今年の新語」で昨年度大賞として選ばれたのは「タイパ」でした。「一刻千金」や“Time is money.”という格言があるように、限られた時間をいかに効率的に使うかというタイパ（タイムパフォーマンス）の重要性は何も二十一世紀の今に限ったことではありません。ただ、目まぐるしく変化する情報過多な現代社会においては、時間効率重視の傾向が極端に強く、例えばオンライン講義の動画を二倍速で視聴する、あるいは昨今話題の ChatGPT で YouTube 動画の要約だけを読むだけでなく、タイパ重視のあまりストーリー性のある映画やテレビドラマまで二倍速で見る、そして小説はあらすじと結末だけを Web サイト上で読むといった人が増えているそうです。あらすじと結末だけを知っても、長編小説の最大の魅力である作品世界への没入感は決して得ることができません。溢れかえる情報に囲まれながら慌ただしく時

間に追われる毎日だからこそ、大好きな長編小説を何日もかけてゆっくり味わいながら読むことが、最高にぜいたくな時間の過ごし方なのです。ぜひみなさんも、そんな豊かな時間を味わうことのできるお気に入りの長編小説を見つけてください。ここでおすすめた作品以外にも、映画化やアニメ化などメディアミックスされることも多い「本屋大賞」や「日本ファンタジーノベル大賞」受賞作品はおすすめです。私も、先日予約した「日本ファンタジーノベル大賞二〇二三」受賞作品、武石勝義著『神獣夢望伝』が届くのを心待ちにしているところです。



にい あきこ
外国語学部・英米語学科

「事実」と「小説」のあいだで

小堀 慎悟

過去との出会い

歴史家である私にとって、文学、とりわけ小説はアンビバレントな存在である。過去の「事実」と誠実に向き合うことを旨とする歴史家として、歴史小説で描かれた脚色された情景がさも「事実」のように語られることにいい気はしない。一方で、歴史家によって生み出された叙述がある種の「作品」である以上、歴史家が小説から学ぶこともまた多くある。

少年時代に親しんでいた小説として思い浮かぶのは、コナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」シリーズである。決してシャーロックアンを名乗れるほどに読み漁ったわけではないが、主人公であるホームズやワトソンの活躍に心を躍らせたものであった。それから二十年以上がたち、曲がりなりにも歴史家を名乗るようになって改めて作品を読むと、かつては気にも留めなかった物語の背景に関心が向くようになった。

そもそも語り手であるワトソン医師は、軍医として従軍したアフガニスタンでの負傷をきっかけにホームズと下宿生活を共にすることになる。実際、当時イギリスは、中央アジアへと勢力拡大を狙うロシアが植民地であるインドにまで影響を及ぼすことを警戒し、一八七八〜八一年の第二次アフガニスタン戦争によってアフガニスタンを事実上の保護国としていた。また事件を通して彼らが出会う登場人物の描写からは、作者であるコナン・ドイルから見た当時のイギリスの様々な階級の人々の様子をうかがうことができる。「事実は小説より奇なり」というが、一方で作家の描き出す世界が「現実」に根差しているからこそ、その小説は人々の心を捉えて離さないのだろう。

現在との出会い

COVID-19の流行下において、ダニエル・デフォアの『ペスト』とアルベール・カミュの『ペスト』を読んだ。やはり実際に発生したペストの被害を題材として描かれたその内容は、我々が今まさに経験していることそのものであった。知らず知らずのうちに忍び寄り、ある日突然その姿を現す疫病、隔離される感染者

と「接触者」、常に危険に身をさらしながら「最前線」で「戦う」医療従事者とその協力者。何事もないかのように過ごす一部の人々を除けば、ある者は家に閉じこもり、ある者は感染の中心から逃げ去り、ただ「嵐」が過ぎ去るのを待つ。そして権力によって「終息」が宣言されると、人々は「日常」を「取り戻す」のである。

しかし、小説の描写が我々の実体験そのものであるということは、「二十一世紀の我々」は「十七世紀のロンドン」や「二十世紀半ばのオラン」の「経験」を忘れてただ同じことを繰り返していたに過ぎなかったとも言える。かつて享受した「日常」と「嵐」の経験を経たあとの「日常」とは、決して同じであるはずがないし、そうであって良いはずがないのに。それでは、果たして我々はこの三年以上にわたる経験を一体いつまで記憶に留めておくことができるだろうか？

未来との出会い

歴史があくまで「過去」を媒介することによってしか未来を考えることができないのと違って、小説は直接に未来を語ることができる。記憶にある限り、私が初めて手に取ったSF小説はH・G・ウェルズの『タ

イムマシン』であつたと思う。当時小学生だった私はこれについてもやはりその背景をよく理解できなかったのだが、そこに描かれたディストピアに対して強い恐怖を感じたことはよく覚えている。

二十一世紀も二十年以上が過ぎた今、SF小説が描く未来の一部は現実になりつつある。二〇二二年二月以降核戦争の危機は確実に増大したし、カズオ・イシグロの描くクローンによる臓器のストックは再生医療によってより倫理的に問題のない形で実現されつつある。そして人工知能については、我々は今まさにChatGPTへの対応に迫られている。

ところで、連載当時は架空の番地だったホームズの住んだベイカーストリート221Bは、その後のロンドンの区画再編によって一度は実在の番地となった。「小説」も「事実」になりうるのである。そしてこれからどのような「小説」を「事実」にしていくのかは、過去の経験を踏まえた今の我々による主体的な選択に懸かっている。



こばりしんご
外国語学部・中国語学科



「好き」を追う

小黒 江莉果

新たなスタート

大学を卒業して一年が経ち、私は University of Florida と書かれた新しい学生証を手に入れている。学生として次のステップへ踏み出す決断を下し、新卒入社した会社を一年で退職した。テーマパークのような動物保護施設を日本で開設することを目標に、現在は、修士課程の Shelter Medicine という動物保護施設の運営に関する専攻で学んでいる。一路邁進か、はたまた紆余曲折か、そんな私の人生をこの場を借りて皆様と共有できればと思う。

がんばらないと

もともと英語は得意ではなく、高校二年生の学年末試験は学年最下位。答案用紙に「がんばらないと」と赤ペンで書かれていた。それでも、「科目」としての英語は苦手だったけれど、コミュニケーションの「手段」としての英語に苦手意識はなかった。むしろ、自分とは異なるバックグラウンドを持つ人々に英語で話しかけ、自分の知らない世界を教えても

らう時間が大好きだった。

アフリカ地域専攻での一年

多くの学生が大学受験で勉強時間のピークを迎える中、私は入学後から次第に勉強量を増やした。その努力がまず報われたのは、二年生。東京外国語大学への国内留学の切符を手に入れた。アフリカ地域専攻に所属。高校時代にアフリカなどの少数民族を撮影する写真家のヨシダナギさんの作品を見たことをきっかけに、唯一無二であり色鮮やかなカルチャーが気になってたまらなかったことが全ての始まりだった。

国内留学の一年は、新しい学びの連続で日々私の中の常識がぶち壊されていく感覚があり、それが楽しくて楽しくて、今まで以上に勉強に没頭できた。海外留学の出願条件をようやく達成し、海外留学が決まったのもこの頃。英語が学年最下位だった私からの卒業、そして入学前から目標としていた海外留学への出発。

アメリカへの交換留学

三年生二期からアメリカのクレムソン大学での留学を開始した。留学先には、獣医学とアフリカ地域どちらも学ぶことができる大学を選んだ。授業は英



語力が及ばず、先生に録音の許可をもらい、授業後に何度も聞き直した。自分が学びたいことをとことん突き詰めて学ぶことができる環境と、世界中から集まる友達が存在が私を支えてくれた。英語を「手段」として使いながら、自分の知らない世界を知ることができた。冬休みには、ロサンゼルスにある動物保護施設でボランティアをした。この経験がきっかけとなり、今の大学院での Shelter Medicine の学びにつながっている。

笑顔とジェスチャーが共通言語

卒業後は、「世界最大規模の電子機器の墓場」と呼ばれる西アフリカ・ガーナのスラム街で環境・貧

困問題の抜本的解決を目指す会社に就職。回数にして三回、期間にして計半年のガーナ出張も行かせていただいた。まさに、百聞は一見にしかず。スラム街での活動は、人生で一番辛くて大変な経験だったけれど、人生で一番充実していた。私たち先進国の豊かな生活の裏には、グローバル

サウスの人々の生活が犠牲になっていることを目の当たりにする。そんな厳しい生活の中でも、ガーナ人の優しさに救われてばかりだった。

村で生活をしていた頃、近所の家族が毎晩ご飯を作ってくれた。お肉やお魚も一番大きな塊を私に譲ってくれた。英語が話せない彼らと、ローカル言語が話せない私。それでも、一緒に時間を過ごす中で次第に意思疎通ができるようになった。私が村を離れる日には、肺が潰れるほどのハグと「また帰っておいで。」と言。ガーナに家族と呼べる存在ができた瞬間だった。また会いに来よう。

学生の皆さんへ

「好き」を追求する中で、今こうして一つ一つの活動が線としてつながり始めてきた。そして、「好き」を追求できる環境が一番整っているのは、大学ではないかと感じている。だからこそ、学生の皆さんには今まで以上にギアを上げて、学ぶことに貪欲であってほしい。あなたの「好き」は何ですか？



おぐろ えりか

現代国際学部・現代英語学科卒業

複言語の世界



more unified, and the Saxons started to move into the Cornish-speaking lands, the areas where Cornish was spoken were reduced and pushed further west. From this point, Cornwall faced a battle for survival. The people held on to their language and customs, but by the 16th century English had become the dominant language of religion and business. Cornish hung on for another 200 years, but it was a losing battle. No one can say exactly when a language dies, but it is generally accepted that the last true monolingual speaker of Cornish was Dolly Pentreath, who died in 1777.

Of course, a language does not instantly disappear. Many words from the old Cornish language, particularly those connected with Cornwall's main two industries, fishing and farming, remained in use, a few still can be heard today. Most of the names of towns and villages in Cornwall are from the Cornish language; for example, Penzance (Holy Head), Camborne (Crooked hill), Angarrack (the Rock). Many family names come from Cornish, beginning with *Tre...* (*homestead*), *Pol...* (*pond*), *Pen...* (*head*). So in a sense, the language still lives on in daily speech, even though many Cornish people nowadays do not know the original meaning of the names.

When a language dies, a part of a nation's soul dies. Languages are disappearing fast around the world. Language and culture are bound together; a language death usually leads to the disappearance of many aspects of the culture. The sister languages of Cornish were a little luckier, though they too have had to fight to survive. Welsh, a close relative to Cornish, is getting stronger due to great efforts to strengthen it. Scottish Gaelic is hanging on, but survives mostly in remote islands. So what happened to Cornish?

(continued on p.21)

Kernewek

Philip Rush

Deth da, matys. Fatel a-genough why? Otomma yu an gavas goth an Gernow; kernewek yu.

These words are a typical greeting in the old Cornish tongue, a language which flourished in the south west of England for over a thousand years. Sadly nowadays there are very few who can communicate in this ancient language; but we need to start at the beginning of this story.

We are not completely familiar with the Celtic languages spoken in England before the coming of the Romans in 55A.D., as there are no written records. However, with the arrival of the Anglo-Saxons from the 6th century, the Celtic-speaking peoples were pushed north and west, settling in the areas now known as Scotland, Wales, Cornwall and Ireland.



Just as European languages began to take different forms, the Celtic languages did the same. The language of Cornwall, Cornish, began to develop its own character. Because of its isolation and the harsh landscape, Cornwall was not so much affected by Anglo-Saxon. It remained the everyday language of the people. However, as its neighbour England grew

Cornish of 500 years ago and 200 years ago. Cornish scholars and teachers divided into three groups; one wanted to use the Middle Cornish, another preferred Later Cornish, and the third wanted the Unified version created in the early 20th century. At this point, it is believed that there were only around 300 fluent speakers of Cornish, with another thousand or so who could manage a few simple phrases. Can you imagine learning Japanese with three different spelling systems and some differences in grammar? The inevitable result was a slowing down of Cornish learning and interest in the language, and the struggle for dominance between these three groups continues.

I love languages. When I began to learn the old language spoken by my distant ancestors, somehow, despite the huge difference in our lifestyles then and now, it brought them closer to me. How hard it must have been to survive in such a hard and unforgiving rocky land, where the seas are wild and dangerous, and the soil poor. I studied Cornish until I came to Japan, but sadly here, as you can expect, it is hard to connect. There are less than 300 speakers in the world, and very probably I am the only speaker in Japan. My aunt is over 90 years old now, but still fights to keep Cornish alive. I hope I can do so too.

フィリップ・ラッシュ
外国語学部・英米語学科



pellwollok – television! pellgowser – telephone! jynmargh – airplane!

In 1904 a Celtic scholar, Henry Jenner, made the first effort to revive Cornish with his *Handbook of the Cornish Language*. His main purpose was to teach the language and ensure its existence. Think of the problems he faced. Cornish had effectively disappeared 200 years before. There were very few texts with examples of the language, and most of these were religious texts with little connection to daily life. By the 1900s the world had changed, and many words with modern meanings like car, airplane, engine, had no words in Cornish, as they did not exist at that time. So Jenner had to invent words for his new Cornish. Can you guess what these three machines are?

pellwollock (far-seeing) pellgowser (far-speaking) jynmargh (flying horse) — answers below!

A Cornish dictionary was made in 1934, but learning the language was restricted mostly to scholars. The 1970s and 80s saw a big revival in Cornish. I was living and teaching in Cornwall at the time, and this is when I began to learn the language of my ancestors. Cornish was taught in schools, and more and more people became interested in learning at least a few words. My aunt, Hilda Gillbard, became so proficient in Cornish that she became a Bard, or teacher. Things were looking bright for Cornish — then it started to go wrong.

A language is a living organism. It changes and adapts with time. However Cornish did not have this long time to develop. In order to spread, it had to be “unified” — in other words, all teachers and learners had to agree on basic spelling and grammar rules to be taught to learners. As I said earlier, there were very few texts in Cornish, and because there was no dictionary, the spellings were random. Also, there were differences in the written

ロシア語を通して触れることのできる世界

齋須直人

複数の言語を勉強する意義

去年二〇二二年二月二十四日にロシアによるウクライナ侵攻が始まりました。私は同じ年の四月から名古屋外国語大学に着任し、働き始めることになりました。侵攻開始の日は丁度名古屋で住む家を決めた翌日で、名駅キャンパスの横にあるイオンモールで家具を見ていたのを覚えています。大きな衝撃を受け、その後一ヵ月ほどはほとんどの時間をニュースを追うことに費やしてしまいました。戦争開始後、皆さんもテレビでロシア語やウクライナ語を耳にしたり、キリル文字を目にする機会が増えたと思います。

ロシアは偽情報を沢山含む露骨なプロパガンダを発信し続けています。そのため、ロシアのニュースも信用されなくなりました。それでもやはり、ロシア語のニュースを日本語や英語のものと比べると、ロシア発の情報が伝言ゲームのように歪められて日本語や英語で伝わるものがしばしばあるのを知ることができます。このように、複数の言語で事態を見比べてみると、様々なことに気づくことができます。それを改めて強く実感されられたのがウクライナ侵攻でした。

英語と日本語のみでは知ることのできない情報があります。複数の言語を学ぶことで、こうした情報にアクセスすることができます。

大学四年間の比較的時間のある時期に、三つ目、四つ目の言語を勉強することには大きな意義があります。その中でも、ロシア語は難しい言語であると言われますが、その分、学習することで得られるものも少なくありません。

ロシア語について

ロシア語は英語と比べても初級文法で覚えなければならない項目が多く、特に格変化の習得には時間がかかります。キリル文字という、英語のアルファベツトと異なる新しい文字に慣れてスムーズに音読できるようになるまでもに多少時間がかかります。

しかし、文法項目が多い分、文法の知識でカバーできる表現の幅が広いという利点があります。文法は多くても範囲が限られていますから、訓練を続ければいつかは習得できます。発音は英語よりも簡単で、文字と発音が対応しています。冠詞がないですし、時制も少ないので、これらの文法項目で悩むことも少ないです。私個人の印象では、長い目で見れば、ロシア語の方が英語よりも学びやすい言語です。

ソ連崩壊後、世界におけるロシア語話者数は減少し続けています。特に、今回の戦争によって、ウクライナだけでなく、周辺国のロシア離れ、ロシア語離れも加速することでしょう。対露制裁によって日本企業の多くがロシアから撤退し、日本はロシアの非友好国にもなりました。今のところ、ロシア語を仕事に用いる可能性は従来よりも減ってしまったと言わざるを得ません。同時に、ロシアの動きが世界情勢の動向を大きく左右する状況はしばらくは変わらないでしょうから、その隣国である日本に住む我々にとっては尚更、ロシア語を勉強することの意義は低下していません。

ロシアは文化大国でもあります。ロシアでは直接的な政治的発言することが命にかかわることもしばしばあったため、ロシア人は自分の思想を文学の中に表現してきた経緯があります。日本でも、トルストイやドストエフスキーは有名です。チャイコフスキーやショスタコーヴィチなどの音楽、バレエ、フィギュアスケート、共産主義文化などは日本でも人気があります。また、日本アニメのロシア独自の受容を知りこともきつと面白いはずです。ロシア語を学ぶことでこれらについての理解を深めることができます。

周辺国やロシア国内の多様な民族の文化へのアクセス

ロシア語は、ロシアのみならず、ウクライナやベラルーシなどの東欧、カザフスタンやウズベキスタンやキルギスなどの中央アジア諸国、コーカサスの国々のジョージア、アルメニア、アゼルバイジャン、バルト三国の特にラトビアでも通じます。キリル文字を使う言語には、ロシア語とともに東スラヴの言語に属するウクライナ語、ベラルーシ語の他、ブルガリア語、マケドニア語、セルビア語のバルカン諸国の言語やモンゴル語があります。これら列挙した国々を旅行する際、少しでもロシア語の知識があれば、キリル文字が読めるというだけでなく役に立ちます。

周辺国でロシア語が使われるだけでなく、ロシア国内には多くのアジア系民族やイスラム教を信仰する民族も含む、一九〇程の民族がいます。ロシア語を媒介として、これらの民族の文化を知ることまた私たちの価値観を広げ、生活を豊かにしてくれます。これらの言語もキリル文字で表記されることが多く、その研究は日本でも行われており、日本語で文法書が出ている言語もあります。最近も、白水社の「ニューエクスプレスプラス」シリーズでタタール語の教科

書が出ました。

ロシア語を勉強することで、こうしたユーラシアの多様な文化に触れるチャンスを得ることができます。

ユーラシア・東欧地域への留学

名古屋外国語大学の皆さんは、英語圏に留学する人が多いと思います。あるいはフランス語学科であればフランス、中国語学科であれば中国に留学するかもしれません。大学の制度を使って留学する場合は尚更でしょう。ロシアやウクライナは現状では留学は難しいと思いますが、先に挙げたような様々な地域でロシア語が話されており、カザフスタン、キルギス、エストニア、ラトビアなど、ロシア語留学が可能な国もあります。選択肢の一つとして、こうした地域への留学も念頭においてもよいかもしれません。エストニアやラトビアのように英語も通じる地域であれば、留学のハードルは下がります。基本的には英語圏や西ヨーロッパと比べても授業料や滞在費が安いことが多いです。他地域とは異なる生活様式や価値観に触れることができるでしょう。

ロシア語の勉強によって様々な世界にアクセスできます。是非、少しでも興味を持ったら初級文法から始めてみて下さい。



さいすなおひと
教養教育推進センター

村上春樹の待ちに待った新作が出て、無事、読了したところである。タイトルは、『街とその不確かな壁 (The City and Its Uncertain Walls)』(以下、CWと表記する)。黒地に白の明朝体で縁どったタイトル文字が目にも鮮やかで、どこか秘密めかしたミニアチュールを配したゴールドの英字タイトルには、わけもわからず嫉妬が湧いた。私が読了したのは、電子図書だが、いつもの習慣で、別途、単行本も一冊だけ買い求めた。これまで、村上春樹の小説が出るたびに、一冊は書き込み用に、もう一冊は保存用にと、ほぼ例外なく二冊買い求めてきた経緯があるからだ。ただし、今回の読書はいつもと多少勝手が違って、保存用の本の余白がけっこう書き込みで埋まった。

Kindルの電子書籍でCWを読みはじめた私は、たちまちこれが、同じ村上の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(以下、EWと記す)と深く関わりがある物語であることに気づいた。と同時に、何とも不吉で、いやな予感が頭をよぎった。そもそもEWは、これまで何度か挑戦しては挫折を繰り返してきた小説だったからだ。「EWは最高」と無条件に褒め上げる友人に出会うたびに、内心忸怩たるものを覚え、焦燥感にかられた

こともあった。この、不吉で、いやな予感を吹っ切るには、もはや手段を変えざるしかなかった。ほかでもない、オーディオブックに訴えるのである。幸い、オーディオブックには、宮部みゆきの一連のミステリー小説を読破した嬉しい成功体験があり、多少とも自信があった。しかも意外なことに、EWもまた、村上作品ではめずらしく、他の作品に先んじてオーディオブック化されていることがわかった。この新たな作戦が、みごとに図にあたった。合計二十五時間に及ぶ耳読書はなかなかの試練だったが、『模倣犯』の七十五時間と比べれば、なにも大げさに言うほどの労苦ではない。出勤用のバッグに、常時、上下二巻の文庫本を忍ばせ、気になるくだりはすべて活字でチェックという態勢を貫いた。おかげで空き時間がなくなり、時としてちよつとした億劫に感じられる夜の散歩までが、大きな楽しみの時間と化した。散歩するというよりも、ひとり夜の遊園地のモノレールでいくこともしれぬ終着点まで運んでもらう気分である。

こうして私はついに、CWへの挑戦権を得たのだった。

しかし、忘れてはいけぬ。CWは、独立した作品というより、あくまでもEWの続編

EW+の誕生

として構想されていた点である。本体を知らなければ、ある意味ではほとんど意味をなさない物語を、村上は、刻苦して織りあげた。EWの信奉者にとつてはおそらくあらざるものな続編であり、その意味で『カラマゾフの兄弟』における続編をめぐる事情とは大きく事情が異なる。ドストエフスキーは、小説の冒頭で、この小説が二つの小説からなることを、つまり、続編があることを明言している。他方、EWにはそれに類した予告もなく、おまけに、奇数章、偶数章ともに、ゴージャスで（奇数章）、かつ沈鬱な（偶数章）ながら、申し分のないエンディングが用意されている。にもかかわらず、村上は挑戦した。齢七十を越えて、これを書かなければ死にきれない、との切迫した思いに突き動かされたのだろうか。

これは、私のたんなる空想にすぎないが、この一世一代といつてよい決断を下すにあたり、村上は迷いに迷ったはずである。たとえれば、続編が、すでに定着したEWの声価を曇らせることになりはしないか、といった不安。しかし、ひと言感想を述べておくなら、ここに新しい姿のEWすなわちEW+が誕生したことを私は心から嬉しく思っている。少なくとも、複数のバージョンをもつブルックナー

の交響曲よりはるかに幸運だと思う。何といても、続編は作者自身の手によって書かれているのだから。おまけにCWのエンディングには、EWにはない、寂寥の極みともいふべき新境地が描かれている（「ぼく」が去ったあとの「街」の図書館の娘の孤独が思いやられ、胸が塞がるような悲しみを経験した）。ただし、世の批評家たちが、この作品の登場によつて大きな難題を突きつけられたことは確かである。今後、EWについて語る際に彼らは、CWをEWの有機的な一部として扱うか、互いに自立しあう物語として論じるべきかで、大いに迷うことになる。しかしその問題は、私たち一般読者には無縁である。私自身、素直な気持ちで、このCWをあくまでEWの続編ないしは有機的な一部として受けとめていく心づもりでいる。なぜなら、すでに二つの物語は一体となつて私の心のうちに独自の世界を築いているからだ。近い将来、このEWについて論じるとき、私はもはやこの略号を使用することをやめて、EW+の新しい略号を用いることにする予定である。そして今は、二つの物語の接合という大手術による手術痕ができるだけ速やかに消えるのを待つばかりである。

かめやまいくお

本をめぐる10の質問

吉見 かおる

原 慎之介

石田 聖子

惹かれます。実際的な問題として、移動中やいろんな場所に持ち運んで読むことが多いので、文庫本がありがたいです。

3 本を読むお気に入りの場所やシチュエーションはありますか？

吉見 お散歩をしながらたまたま見つけたカフェに入って、その隅っこに座って読む時です。

原 あまり強いこだわりはなく、自宅でゆっくりと読んでいます。

石田 静かな場所でも本の世界に浸りたいですね。じっくり堪能したい本があるときは、読書に集中すると心に決めて、静かなカフェや公園に向きます。スマホは機内モードに設定します。

4 馴染みの書店や図書館はありますか？

吉見 古本屋が好きです。藤が丘駅から十分ほど歩いたところに「千代の介書店」というちょっと変わった書店があります。開店当時に飼っていたご主人の愛犬（ブルドック）が「千代の介」だったそうです。

読書は自分の「根っこ」に養分を注ぐこと。学生時代ほど読書に適した期間はないと思います。それぞれ専門の異なる出版会編集委員三名に本（長編小説に限らない）について尋ねてみました！

1 ふだんどんな本を読みますか？

吉見 エッセイが好きです。歴史ものもよく読みます。大人になってから小説をもっと読みたいと思うようになりました。日本文学もゆっくり味わいたいです。

原 最近あまり趣味の本を読めてはいませんが、経済・ビジネス小説が好きです。完全にフィクションとは言いきれないものも多く、モチーフとなった企業や出来事を考えながら読むのが面白いです。

石田 気になるテーマについての新書をよく読みます。小説ではSFが好きです。誰も見たことのない世界を生み出す想像力に驚嘆するだけでなく、現実社会の批判としても楽しんでいます。

2 本を選ぶポイントは何ですか？

吉見 著者がどんな人間かわかると、そこに惹かれて読みたくなります。世界文学を読むときも同じで、どの翻訳者の声を通して読みたいか考えます。

原 自分で新しいものをみつけるというよりは、ニュースやSNS等で話題になったものから選ぶことが多いです。

石田 フィクションの場合、リアルなものより現実離れた設定のほうにこちら

原 最近は電子書籍を購入することが増えてしまい、馴染みの書店と呼べるところを見つけることができていません。

石田 本が並んだ場所にいと受け入れてもらえる安心感が湧き、どこでも落ち着きます。とくに留学中、ほぼ毎日開館から閉館まで過ごしたボローニャ大学芸術学部附属図書館には我が家のように馴染みました。

5 読みたいのに読めない本はありますか？

吉見 マンガなのですが『ワンピース』です。

原 アーサー・C・クラークの『2001年宇宙の旅』です。映画は観たのですが、小説は続編も出版されているので時間を作って読んでみたいと思っています。

石田 ロシア語の詩を原語で読んでみたいのです。これまで何度かロシア語の詩の朗読を聴く機会があったのですが、そのたびに（内容はちんぷんかんぷんなのに）深く感動したためです。

6 記憶に残っているなかでもっとも幼い頃に読んだ本を教えてください。

吉見 絵本の『ねずみくんのチョッキ』です。お母さんが編んでくれた真っ赤なチョッキをねずみくんは他の動物のお友達に次々貸してあげるのですが、どんどん伸びていってしまふ。そのシュールな展開が大好きでした。

原 『ぐりとぐら』です。本を読むたびに、母にホットケーキを作って欲しいとねだっていた記憶があります。

石田 『おしおのぼうけん』を繰り返し読んだ記憶があります。私自身が押し入れて遊ぶのが大好きだったので、そんな馴染みの場所が異世界に繋がるというストーリーに引き込まれました。

7 これまでにもっとも影響を受けた本を教えてください。

吉見 いくつかありますが、河野義行さんのエッセイ本『命あるかぎり』です。読み終えた時は、自分の中で深く問いかけられる沈黙が残りました。

原 『ザ・ゴール』というビジネス小説です。物理学者が自身の提唱する経営管理の理論を企業家に読んでもらうために執筆したという本で、大学院講義のテキストとして出会いました。自身の研究テーマに大きく影響を与えた一冊です。

石田 「聖書」です。キリスト教系の高校に通っていた際に読みました。そこに書かれていることが世の中で起こる様々な事象や物語の原型になっていると感じ、衝撃を受けました。

8 学生時代に読んだ本について教えてください。

吉見 アジア学科で勉強していたので『大地の子』（山崎豊子、一九九一年）が気になり読みました。衝撃と感動の経験でした。文藝春秋創刊一〇〇周年記念で刊行された漫画版（二〇二二年）も素晴らしいです。

原 映画にもなった『ダ・ヴィンチ・コード』の小説を読み、いつかルーブル美術館に行ってみたいと思いました。

石田 古代ギリシア・ローマの神話や哲学書など古代に書かれたものが好きでよ

く読みました。現代のものでは、イタリアの作家イタロ・カルヴィーノの小説『見えない都市』を読んで、文学のもつ可能性に開眼しました。

9 学生時代の図書館（国内・海外）の思い出を教えてください。

吉見 ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ・バンクーバー）の中央図書館地下二階でよく過ごしました。薄暗くて埃臭い空気が漂っていたのですが、なんとも落ち着くスペースでした。

原 横浜国立大学の図書館です。カフェやパソコン利用の目的で訪れたことのほうが多かったですが、ドラマの撮影にも使われたガラス張りの建物でお気に入りでした。

石田 イタリア・ボローニャのアルキジソンナジオ館内図書館が忘れられません。ヨーロッパ最古ボローニャ大学の知が集積した場所です。留学時よく利用しましたが、歴史の重みを肌で感じて興奮したものです。

10 学生にお勧めしたい本を三冊教えてください。

吉見

― J・R・R・トールキン『指輪物語』（魔力に立ち向かう勇敢な仲間たちが登場します。壮大なストーリーです。本物の友情について考えさせられました）
― レイ・ブラッドベリ『華氏451度』（人間は思考せずにはいられない。それに気づくと、自分を取り戻すことができると。読書はその一助になる。そんなことを教えてもらいました）

― サン＝テグジュペリ『人間の土地』（人間であることは、責任を持つこと。とても心が打たれた引用です。『星の王子さま』に潜むメッセージが描写されています）

原

― 山田真哉『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？』（社会人になる前にぜひ読んでほしい会計の入門書です）

― エリヤフ・ゴールドラット『ザ・ゴール』（影響を受けた本と重複しますが、ビジネス小説としても面白いのでおす

めます）

― J・K・Rowling, Harry Potter and the Philosopher's Stone（言わずとしたシリーズの第一作目ですが、原書にチャレンジしてみてもいかがでしょうか）

石田

― 岡本太郎『自分の中に毒を持って』（情熱を持って生きた人間の生きざまに触れてみてください）

― ヴィクトール・E・フランクル『夜と霧』（ホロコーストという圧倒的な経験で人間性を失うことなく生きた著者による貴重な証言です）

― 鴻上尚史『演劇入門』（副題は「生きることとは演じること」。現代を生き抜くのに有用な演劇観が示されています）

よしみ かおる

現代国際学部・現代英語学科

はらしんのすけ

現代国際学部・グローバルビジネス学科

いしださとこ

世界教養学部・世界教養学科

私の外国語遍歴

村上文

「外語大」という言葉を聞くと切ないような虚しいような気持ちが込み上げてくる。私も二十年くらい前はみなさんと同じ外語大生だった。どちらかというと嫌な思い出のほうが多かったかもしれないが、とにかく好きなだけ外国語を勉強できるという、いま思うと贅沢で稀有な時を過ごした「場」だった。

外語大は大学に入る前に専攻の語科を決めなくてはならない。当時の私はドイツ語かロシア語で迷った。しかし迷うなら違う言語にしようと思前になつて軽率にフランス語に変えた。なんとなくシャンソンとか歌えたらステキかもと思った。

入学後はフランス語を勉強したわけだが、ロシア語への思いが捨てきれず、ロシア語の授業もとった。結果ロシア語にどハマリし、はじめての海外旅行はロシアになった。旅行でルーマニアにも足を伸ばし、ついでにルーマニア語も齧ったりした。ロマンス系とスラブ系が混ざった言語は非常に難しく、これはすぐに挫折した。

月日は経って現在まじめに社会人をやっている。仕事に追われる毎日で、外国語との付き合いは学生時代に比べると非常に薄くなってしまった。ところがある日、電撃的な出会いが訪れた。K-POPである。

二〇一八年頃、知人に勧められてK-POPのミュージックビデオを観たときに度肝を抜かれた。その後、他のいろいろなK-POPを漁るようになり、完全にハマってしまった。

ヒップホップ、R&B、エレクトロなど、さまざまなジャンルを包摂しながら音楽性とビジュアルともに常に新しさを追い求める音楽には、人々を惹きつけ飽きさせない魅力があった。それから私は韓国語を勉強しはじめ、その年なんと三回も韓国に行ってしまった。コロナ禍のあいだも勉強を細々と続けて、今はデュオリンゴ（外国語学習アプリ）が主に私の勉強のお供になってしまっているが、なんとか継続している。気づくとシャンソンではなく、カラオケでK-POPを歌っていた……。こんな外国語人生もありかもしれない。

「レポートの書き方」⑧

「学期末レポートの書き方（6）」

真田 郷史

学期末レポート（学期末に試験の代わりに課される授業レポート）の意見文タイプ（特定の問題について考察し結論へと到る過程全体を、一つの意見として陳述することを課題としたもの）について、作成する際の留意点をお話しています。今日はその6回目。「本論」での考察と「結論」でのまとめ、レポート完成までの最終プロセスを取り上げます。

これまでのお話の中で、2つの比喩を使って説明しました。1つは、意見文タイプ（論述形式）のレポートの基本である「三部形式（序論・本論・結論）」について、これをハンバーガーに喩えました。つまり、意見文の基本構成は、中心

部分の考察過程（「本論」）に相当するビーフパテを、「序論」と「結論」という上下のバンズで挟んだハンバーガーのようなものだ。もう1つの比喩では、レポート全体を一つのお話と見立てて、これを推理小説に擬えました。つまり、お話の冒頭で提示された事件の謎（問題）が、クライマックス（結論）で見事に解明されるわけですが、名探偵が名探偵である所以は、この事件解明（結論）に誰もが納得する裏付け（理由・根拠）を示し得る、という点にあるわけです。意見文タイプのレポートもまた、この「裏付け」に眼目があるということです。

さて、前者の比喩から理解して欲しい

のは、「序論」・「結論」と「本論」のレポート全体における役割の違い、したがってまた、それぞれの文章の性格的相違ということ。 「序論」は、レポートで何を考えようとしているのか問題を提起し、読み手の関心を「本論」へと誘う導入部分です。「結論」は、「本論」での考察を振り返りながらこれを要約し、そこからどのような結論が得られたのかを述べる、いわば総括的な部分です。したがって、結論部もまた読み手の理解を促すために書かれる、と言って良いでしょう。つまり、「序論」と「結論」ではとりわけ読み手を意識する必要がある、そこに書かれる文章は明解である（分かりやすい）ことが第一です。文章の性格としては、説明文ということになります。

これまでも何度か触れていますが、「序論」と「結論」の中では、考察や検討・議論といった「本論」の中で展開すべき内容を、決して書き込んではいけません。ハンバーガーの比喩で言えば、上下のバンズの中にチーズやベーコンを練り込ん

ではないけない、ということです。「本論」を構成すべき具材は、飽くまでもすべて「本論」の中に書くこと。さもないと、「序論」・「結論」と「本論」の役割の違い、文章性格の違いが曖昧になってしまうからです。漫然としたメリハリのない文章になってしまいます。

例えば、「序論」で提起された問題（大きな問い）が、さらに幾つの論点（小さな問い）に分析されるかは、これは問題そのものについての説明ですから、「序論」の中に書いても構いません。（場合によっては、「本論」の冒頭に書くことも可能です。）「本論」では、この論点ごとに（第1節・第2節・第3節……と）分けて考察して行くこととなりますが、「序論」に書かれた論点列挙は、飽くまでも「本論」の予告です。予告編がどんなに attractive であつても、予告編が本編に取って代わることはあり得ません。書き手の方が心逸つて、いきなりトップギアということのないよう、気を付けましょう。

同じように、例えば、「結論」において「本論」での考察を今一度要約するのは、これは既に書かれていることの簡潔な再確認ですから、説明の文章です。しかし、「本論」では扱わなかった新しい論点を持ち出して、オマケのような考察を「結論」の中に書き足すのは駄目です。どうしても書きたかったら、「本論」の中に書けば良いのです。それほど重要でない話なら敢えて触れないか、あるいは「注（巻末注）」の中で処理する方法もあります。いずれにせよ、考察や議論はすべて「本論」の中に書き、「本論」の中で完結させること。「本論」が終わつても、まだ何かウダウダと考察しなければならぬようなうなら、そもそもレポートとしては失敗しているということです。

ただし、「序論」で提起した問題を1本のレポートの中で、そのすべての論点にわたって完全に解決するということは、実際にはあり得ない話で、何がしかの未解決な論点がどうしても残ります。それらについては、中途半端に論じない

で、将来的な課題とします。「次回（という機会があれば）改めて取り上げたい」と、「結論」の中に書いておくのが一般的です。この間の事情は、2つ目の比喩である推理小説に擬えて言えば、ある作品の中で当面の事件が一応は解決した（犯人、犯行動機、手口等が解明され、犯人が逮捕された）ものの、実はその犯人（実行犯）を裏で操っていた黒幕がいた、というような場合と考えれば良いでしょう。連続TVドラマなどでは、良がある手法ですね。扱うテーマにも依りますが、実際のレポートでも、「序論」で立てた問いが「本論」での考察を経て、「結論」において一定の答えに到るとしてもなお、問いの背景となっている社会状況を考慮する時、より大きな文脈の中で、最初の問いの発展形として新たな問いが立ち上がって来る、ということは十分にあり得るわけです。そのような場合は、先ほど述べたように、「今後の課題」として「結論」の中で指摘しておくことは構いません。いわば「次回の子

告」であり、「To be continued.」とそう
ことです。

ともあれ、「序論」・「結論」と「本論」
との違いを常に意識し、メリハリの利いた
文章を心掛けることは、良いレポートを
書くための一つのコツと言えます。「序論」
や「結論」に書くべきことと書き得るこ
とを、しっかりと自覚しておいて下さい。
では、「本論」についてはどうか。当
然のことながら、「本論」は単なる説明
文ではありません。たとえ部分的に説明
の箇所があったとしても、全体として見
れば、「本論」の文章は説明ではなく、
推論ないし論証でなければなりません。
つまり、「序論」で提起された問題の分
析による幾つかの論点について、どのよ
うに考察を進めて行けば最終的な結論
(問題への解答)にたどり着くのか、そ
の考察の過程を順序立てて論理的に示し
て行きます。言い換えれば、レポートの
中であなたが「自分の意見」として主張
したい結論を、読み手が納得してくれる
ように証拠立てる、ということなのです。

れについては、既に前回、推理小説の主
人公(名探偵・名刑事)がお話のクライ
マックスにおいて、事件の謎を鮮やかに
解明してみせることによって、いかにし
て周囲の人々を納得させるか、という点
に似ていると説明しました。要するに、
レポートの中心部分である「本論」は、
結論の妥当性を証明するために書かれる
のであって、それこそが読み手を納得さ
せる要だということなのです。

レポート全体の流れから言えば、私が
Aという問題について(序論)、Cとい
う結論を主張するのは(結論)、Bとい
う理由からである(本論)、といった形
になります。この時、AとCは「問いと
答え」の関係、BとCは「理由と結論」
の関係になっていることに、留意して下
さい。

「序論」で立てた問いに「結論」で答
える。この対応は、非常に分かりやすい
ものです。作品の冒頭で示された事件の
謎が結末で解き明かされる、というス
トーリー展開がごく一般的であるのも、

それが読み手にとってごく自然に予想で
きる話の流れだからです。レポートの場
合も、話の流れとしては同じです。ス
トーリー展開の「一つの型」と言っても
良いかも知れません。あるいは、上下の
バンズで挟むことが、ハンバーガーとい
うファストフードのスタイルであるのと
同様に。このスタイル(型)は明確であ
ること、分かりやすいことが第一です。
その上で、問題となるのは、そうした枠
組みの中に何をどう挟み、包み込むのか
ということになります。

ハンバーガーであれ、推理小説であれ、
もちろんレポートであれ、肝心なのは枠
組みではなく中身です。中身こそが、そ
のものの「個性の表現」でなければなり
ません。レポートの話に戻って言えば、
なぜそのような結論Cにたどり着いたの
か、その理由Bを述べているのが「本論」
(中身)だということです。「結論」の前
に十分な「本論」を展開することで、読
み手から発せられる先の問い「なぜCと
いう結論なのか」に、あなたは「なぜな

ら、Bという理由が考えられる。だから、Cという結論になるのだ」と答えることになります。この答え「BだからC」が、読み手を納得させるものとなるためには、理由Bが結論Cを導き出すのに、必要かつ十分なものでなければなりません。そうした理由Bを「本論」で提示することが、（意見文タイプの）レポートを書く意味だと言っても過言ではありません。要は中身だ、ということです。

工芸や模型などの作品に対する評価として、「良く作り込まれている」といった表現が用いられることがあります。この「作り込む」という表現は、レポートをも一つの作品と考える時、とりわけ「本論」に対する評価にも当てはまるのではないでしようか。なぜなら、レポートにおける最終的な結論を証拠立て、レポート全体を説得力のあるものにすべき「本論」での考察は、論理的な視点からどれほど緻密に組み立てられているかが、評価ポイントになるからです。つまり、どれほど緻密に「作り込んで」あるかが、

重要なのです。そこに書き手の工夫がある筈です。確実な証拠を集めて、その上に緻密な推論（論証）を組み立てるというその一点に、最も多くの時間と努力を注がなければなりません。レポートを書くとは、そういうことなのです。

TVの刑事ドラマなどに良く出て来る台詞に、「刑事というのは誰彼かまわずすべての人を疑って掛かる因果な職業だ」などというのがあります。しかし、この「疑う」という態度は、言い換えれば、確実な証拠が得られない間は、それが真実だと安易に断定しない、あらゆる可能性を考慮に入れておく、ということです。真実を追い求め事件を解決するためには、捜査方法としてそのような態度が、どうしても必要なのです。それと同じことが、「本論」の中で推論を組み立てて行く際にも言えます。犯罪捜査では、刑事は偽の証拠や嘘の供述を「疑う」わけですが、レポートを書いている皆さんは、一体何を疑えば良いのか。それは、自分が今まさに書いていることが、「本

当にそう言えるのかどうか」ということです。極端に言えば、「本論」を書いている間は一文書き進める度に、「本当にそう言えるか」と疑って掛かるくらいが良いのです。確実に言い得ることを一つひとつ積み上げて行く、それが推論を組み立てるといふことなのです。さもなければ、緻密な推論（論証）などは望むべくもありません。したがって、読み手を納得させるレポートも書けない、ということになります。もちろん、飽くまでもこれは理想論です。しかし、「良いレポート」を書きたいと思うなら、どこまで理想に近付けられるかと考え、その方向で力を尽くすということに、何の不思議もありません。皆さんの奮闘を期待する限りです。

どうやら、予定の紙数が尽きたようです。ではまた、お会いしましょう。



さなだ さとし
名古屋外国語大学名誉教授

NUFS & NUAS

読書コメント大賞

…読んで書いてつながろう…

「読書コメント大賞」は、これまで出会えていなかった仲間と読書の楽しみを共有してもらったためのイベントで、印象に残った本の感想や批評をそれぞれの個性を生かしたコメント形式で書いてもらうものです。

六回目の開催となった今回は、新たな試みとして、学生、教職員等による一般投票で一位となった作品を「いいね！賞（一般投票賞）」として表彰しました。応募作品総数は百四十二点。その中大賞をはじめ受賞作品十点をここに紹介します。コメントされている本は中央図書館にすべて所蔵があります。コメントを読んで気になった本があったら、是非手に取って読んでみてください。そして、

次はあなたが、読んで、書いて、つながる番です。

※受賞作品（第一回～第六回）は、図書館ウェブサイトで確認できます。



大賞

『正欲』

朝井リョウ 著

物語は月に似ていると思う。月が夜の暗闇を照らすように、物語も人が胸に秘めている孤独や秘密に焦点をあてるからだ。だからこそ、自分の内面を探りあて、物語に人は共感し、感動し、ときに恐怖さえおぼえる。言語化不可能だったものを、あっさりと言語化してしまうからだ。この『正欲』はまさに、秘密を明か

さず息を殺して生きている人々に焦点をあて、我々が言語化を拒んだ真実を、言葉という槍で突きつけてくる物語だ。

美化された「多様性」という言葉がもつ恐ろしさを、現実味のある内容と、著者の圧倒的な想像力が余すことなく暴いていく。世界は全ての人が手を繋ぎ円になれるほど簡単にはできていない。そこで、あなたは試される。円の外側にいる想像もしてこなかった人たちを、あなたは「多様性」の一言で円の内側に招き入れることができるのか。言葉の槍は、あなたの心に深く突き刺さるだろう。私に刺さった槍は、まだ抜けていない。

（無糖）

最優秀賞

『夜行列車』

湊かなえ 著

私はSNSが嫌いだ。みんな幸せそうで全員の人生がうまく行っているように見える。しかし冷静に考えてみればそんなことはありえない。誰もが華々しい一面を持つ一方で何かしらの地獄を抱えている。そしてその地獄はなかなか外から

は見えにくいものだ。

とあるエリート一家で殺人事件が起った。被害者は父親、加害者は母親であった。誰もが羨み憧れる一家から一転、子ども達は近所から後ろ指をさされ、友達とも距離ができ、ネットで誹謗中傷を浴びる。側から見れば完璧な一家の中で、一体何が起っていたのか。

この話は読み進めるにつれそれぞれの抱えていた「地獄」が見えてくる。人の地獄は見えにくく、本人にしかわからないものである。たとえどんなに幸せそうに見える人でも皆どこかしらで苦勞して帳尻を合わせているのだ。

綺麗な部分のみが可視化された現代。そんな現代を生きる我々に必要なのは見えない「地獄」を補う想像力かもしれない。(mtmt)

図書館特別賞 『舟を編む』

三浦しをん 著

言葉というものはひとときも形を留めてはくれない。毎日新しい言葉が生まれ

ては消えていく。そのまま死語として人々の記憶から消滅してしまうものあれば、時にはその形を変え再び命を吹き返すものもある。辞書とは、言葉の意味のみならず、その時代を写す鏡ともなる。しかし、辞書は一夜にして成らず。さまざまな人々の想いを乗せ、膨大な年月を懸けて産み出される。これは、辞書を造る人々の物語だ。

言葉が変容していくように、人の心は動き続けている。不完全で、たまに立ち止まることもあれど、動くことを完全にやめられない。時にその人の心は、周囲の人を突き動かす。変える。そうして、想いは受け継がれる。

人の世の美しさとは、想いを受け継ぎ、永遠に紡がれていくところにある。

この物語で、その片鱗を感じてみてはいかがだろうか。(指人形)

出版会賞 『生まれた時からアルデンテ』

平野紗季子 著

スマホをみながら食べた晩ご飯。味の

感想より動画の内容を覚えている。

そんな私と対極にいるのがフードエッセイストの平野紗季子さんだ。幼少期から「食日記」を綴る平野さんの文章を読めば彼女の食事に對する等身大の愛と敬意を感じずにはいられない。大好きな「食」を全力で楽しんでいる彼女の姿がありありと浮かんできくる。文章から食べ物、匂い、音、色、周りの景色までも見えてくる。食べ物が好きだからこそ生まれた言葉、でもその気持ちわかる！そんな「美味しい」文章が魅力的だ。彼女から食事の傍さ、大切さを教えてもらった。時間に追われる私たちは楽しいはずの食事の席から離れてしまっていたのかもしれない。「食事」と「言葉」と「あなた」を素敵なテーブルに案内し直してくれるのがこの本。

どうやら平野さんの言葉で私の心のレストランは満席になってしまったようだ。すみません、本日の食事にスマホ用のお席はご用意できませんでした。

(きんぶつ)

優秀賞

『戦争は女の顔をしていない』

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ 著

三浦みどり 訳

全く別の世界に來たような感覚であった。

敵の命を奪うことを誰も全く疑わない。それが良い事とされる。死と隣り合わせの世界では、人間は別の生き物に変わってしまうようだ。それが「戦争の顔」なのだろう。

本書には戦争の後にも女性達が「母」という女性の顔を取り戻すことが出来ずに苦しむ様子が描かれる。彼女らは自らの失った「命を育む顔」を取り戻そうと藻掻いた。戦争によって張り付けられた「命を奪う顔」をどうにか引き剥がそうと苦しんでいたのだ。

自身の体験になるが、授業で今日のウクライナの話になった際、ロシア語の先生が泣いていたことが印象深い。どんなに辛いだろうか、家族の出身国が戦争の当事者になってしまうのは。世界情勢が混乱している現在、日本に生きる我々

もこの戦争のリアルに目を向けるべきと考える。ニュースの向こう側に思いを馳せるのである。戦争は女の顔をしていない、しかし戦争に傷つき涙を流すのはいつもの女の顔だ。

(井谷)

優秀賞

『読書について…他二篇』

シヨウベンハウエル 著

斎藤忍随 訳

—— 読書とは、他人にものを考えても
らうことである ——

「読書」とは何かと思ひ悩んだ私にシヨウベンハウエルは語りかける。重く伸し掛かるこの言葉に私はさらに悩んでしまった。—— 読書は思索の代用品にすぎない —— と、シヨウベンハウエルはさらに私を痛罵する。なるほど私が「読書」だと思ひ込んでいたものは、ただの思索の放棄だったのか。

しかしどうだろう。もし「本を読む」という営みを止めてしまえば、書架に眠る彼らは誰かに読まれるのをいつまでも、いつまでも翹望することになるだろう。

書架に死蔵され、悲しげな顔をした本が今も私の袖を引く。

私は今日もまた、頁をめくってしまう。たとえこの行為が思索の放棄だと言われようとも、私は本と共に鬱蒼とした言葉の森を歩んでいく。この歩みこそが私の「読書」なのだ。

(しがな言語学徒 Rin)

優秀賞

『JK、インドで常識ぶっ壊される』

熊谷はるか 著

日本の普通の女子高生が、突然インドに引越すことに。インターネットを使ってインドについて調べたものの、結局なにも分からないままインドでの生活が始まる。豊かな人が車を走らせる横で、1台のバイクに4人乗りする家族や、大使館のすぐ近くに広がるスラム街など格差社会での光と影を描く女子高生視点のインド滞在を記したこの作品。この作品は著者の実体験であり、著者と同年代の私にとってとても読みやすい作品

だった。インターネットだけで知るインドと、現地に降り立って知るインドは全く違うように感じた。安全な国で暮らす私たちが、宗教を信仰している人に対して、「宗教のせいで生活が制限されている」と思ったり、スラム街で暮らす子ども達に対して、「かわいそう」と感じたりする人は少なくないだろう。しかし実際はそんなことはなく、日本人の海外や外国人に対するマイクログレッションが、実際は偏見だったと気付かせてくれる作品だ。

(だみ)

優秀賞 『水上旅日記…ミュンヘン・パリを歩いて』

ヴェルナー・ヘルツォーク 著

藤川芳朗 訳

「あのひとを死なせるわけにはいかない。ぼくが自分の足で歩いていけば助かるんだ」

ニュー・ジャーマン・シネマを代表するヘルツォークが恩師の重病の報せを受け、平癒を祈り、ミュンヘンからパリま

での700キロ、凍てつく大地を歩む。巡礼とも呼べる魂の彷徨は、全編を通して残酷であり美しい。生と死の匂いが嫌でも立ち込める。突き刺すような寒さとはなく、この世以外のものへと変えていく。薄れゆく自我が銀世界と溶け込んで一つになる。現実と空想の境界線がなくなる時、初めて美しい世界が目の前に現れる。過酷で無意味とも思える旅。彼にとつて旅は目的ではなく、手段なのだ。燃え盛る胸の灯が恩師の元へと駆り立てる。からだのなかを、通り過ぎた、あるやさしいもの。私には見える。開いた窓の向こうに、彼が待ち侘びた永い永い巡礼の雪解けが。今こそ飛び立つのだろう。

(もか)

優秀賞

『十字架』 重松清 著

親友。それは互いに心を許し合い自然体でいられる存在。私は親友と呼べる存在が欲しく、また誰かの親友になりたい。しかし、この作品においての親友はそんな

な優しいものではなかった…。

クラスメイトのフジシユンはいじめを苦に自殺した。彼は幼馴染ではあったが、一緒に遊ぶことも話すこともない、ただいじめを傍観していた僕を遺書内で「親友」と呼んだ。これは彼の「親友」として、重く決して降ろすことの出来ない「十字架」を背負った僕の20年間を描いた話。

彼を殺した加害者が背負う十字架、彼を見殺しにした僕が背負う十字架、彼の苦難に気づかないまま息子を失った両親が背負う十字架。それぞれが抱える十字架の重さに読んでいるこちらまで苦しくなる。しかし、この重苦しさは確と受け止めるべきものだ。

人の死の重さや残された者達に与える影響の大きさを感じる一冊。家庭を持ち、母親の立場になってこれを読んだらまた違った感想になるかもしれない。

(やきとりンゴ)

いいね！賞（一般投票賞）

『とてもでない死に方の科学…もし●●したら、あなたはこう死ぬ』

コーディー・キャシディー、

ポール・ドハティー 著

梶山あゆみ訳

貴方は「死」に恐怖を感じますか？

ここでは敢えて断言しよう、貴方は死ぬのが怖い。どう取り繕っても私たちは死に対してシリアスだ。

包丁、階段、滑りやすい床……私たちの生活は死臭に満ちている。「可能性」に塗れた私たちは生存を図る限り、この死臭からは逃れられない……

しかし、本書はそんな生活にひと匙のシニカルさを与えてくれる。概要は書名から察し得るだろう。さまざまな「とてもでない死に方」を科学的な視点でユーモアを加えつつ解説してくれる。

これの面白い点はスケールの極端さだ。包丁、階段、滑りやすい床……これが普段。そこに「もしもブラックホールに飛び込んだら」「バナナの皮で滑って

死んだら」といった「可能性」を加えてみよう。途端に滑稽さを帯びる。

私が当書に魅力を感じた点はここにある。逃れられないシリアスな人生にせめてものユーモアを。死臭に慣れたフリして生きるより、よほどいい。（いも）

学生選書

受賞者のみなさんには副賞として、好きな本を図書館の所蔵用として選んでもらいました。選んだ本は、最優先で借りて読むことができる特典があります。店頭選書、オンライン選書、各自が好きな方法で参加し、三十冊超の本を受け入れました。分野はさまざま、同世代が選んだ本を是非手に取ってみてください。また違う世界が広がること間違いありません。

図書館では受賞作品の発表後、二階テーマ展示コーナーで受賞した本をコメントとともに展示、その後選書してもらった本も展示しています。図書館ウェブサイトにて過去分も確認できますので、是非アクセスしてみてください。



今春から出版会で編集に関わることになりました。どうぞよろしくお願いいたします！

編集者の仕事自体は長くやってきたのに、じっくり長編を読んだのはいつだったか、今回の特集のタイトルを聞いたとき一瞬呆然としてしまいました。仕事のために本を読むことが多かったのでもいつも急いでいて、純粹に本を体験する時間なく生きてきてしまった……この機会に自分をリニューアルしたいです。

ひとつだけ思い出したことがあります。

ある高齢の音楽評論家の自宅に手書きの随筆原稿をもらいに通っていたときのこと。連載も終盤にさしかかって

『魔の山』

出版会から

きたある日、着地点がどうやらシュールートの『菩提樹』と関係があるらしいということが分かったとき、

「ね、だから『魔の山』のね……あたにかいんだ」

というような言葉を微笑みながら、その人が口にしました。

でも私はきょとんとしてしまったのです。トーマス・マンのその小説の名前はそれまでも数回会話にも出てきていたのにまだ読んでいなかった……。

その後三日間は他に何もせず、高橋義孝さんの訳を猛然と、しかしじっくり読みました。最後のところ、戦場で行

軍するあのわれらが「人生の誠実な厄介息子」ハンス・カストルプが「鉦を打った重い靴」で倒れた戦友の手を「木の枝の飛び散った泥土の中へ」「ぎゅつと踏みつけ」進みながら『菩提樹』を低い声で口ずさむところまできたときに、その音楽評論家が本当は何を言いたかったのか、やつと想像できるようなになりました。九十歳を超えていたその人の目に「死」がどんなふうに映っていたのか。

長編小説と取っ組み合うのは面倒くさい。でもたぶん、生きていくうちに何度も思い出すような、命を支える「経験」を連れてきてくれるものだと思います。



Library

5 ^F	展示ホール 中西憲一郎先生資料室	多目的室 事務室
4 ^F	洋書、中国書、語学辞書、参考図書 洋雑誌、中国雑誌	研究個室 4A / 4B / 4C / 4D
3 ^F	和書 絵本、写真集、美術大型本 文庫、参考図書、地図	グループ学習室 3A / 3B
2 ^F	視聴覚資料 面白い本、言語と文化、語学検定 資格・就職（楽）、推薦図書 多読用図書、テーマ企画	ブース 漆/陶/絞/茶 ブース 宮/能 カウンター
1 ^F	新着図書、新聞、和雑誌、文庫 新書、名外大出版会、本学刊行物	N-BASE 総合カウンター
B1 ^F	開架 参考図書 閉架 雑誌 / 新聞バックナンバー 和書、洋書、中国書、視聴覚資料 ※閉架資料を利用したい場合はカウンターに申し出てください。	

視聴覚資料 図書館 2F

図書館では、教養資料からみんなが楽しめる映画資料まで、DVD・BD等の視聴覚資料を豊富に所蔵。特に映画は5,000点以上所蔵しています。

図書館内の視聴ブースは、1人はもちろんグループでも利用できます。(DVD・BD等は館内利用のみです。)

映画を使った学習法

アニメは簡単な単語やストーリーが多く、発音も聞き取りやすいから初心者向きだよ！

お気に入りの映画で、楽しみながら行うことが長続きのコツ！



図書館キャラクター トリイ

映画を使った語学学習

Step 1 英語音声・日本語字幕



出来る限り英語音声聞き取り、日本語字幕で筋筋と登場人物を理解しましょう。Step 1をしっかり行うことで、Step 2をスムーズに行うことができます。

Step 2 英語音声・英語字幕



英語音声と英語字幕のスピードに慣れましょう。英語音声を英語字幕で理解しましょう。映画全編は長いので、1つのチャプターを繰り返し再生することをお勧めします。Listening、Readingだけでなく、分からない単語は辞書を引いて、語彙力アップにもつなげましょう。

Step 3 英語音声のみ(字幕なし)



Listeningに挑戦しましょう。英語音声のみで内容を理解しましょう。字幕が無いことで、より音声と画面に集中することができます。Listeningに慣れたら、細かいニュアンスを読み取りましょう。作品の時代背景やその場に合わせた言葉の選び方、組み合わせ方を学べます。

Step 4 英語音声のみ(字幕なし)



Dictationに挑戦しましょう。聞き取った英語音声を書くことで、似ている単語の聞き間違いや聞き取れない前置詞等、苦手な箇所を把握することができます。また、書き取った文章が文法的に正しいかも確認しましょう。字幕で答え合わせを行った後、再度 Dictation に挑戦しましょう。

Step 5 映画の原作を洋書で読む

洋書に挑戦しましょう。映画で描ききれなかった細かい設定を原作で発見できます。原作を読みこんだら、要約や翻訳へのチャレンジをお勧めします。

ポイント！

- 映画を通して、語学以外の歴史や文化も学べます。
- 海外はもちろん、知っているようで知らない日本についても映像で学べます。
- 映画以外にも、地理・歴史・文化・アート・就職等、さまざまな分野の視聴覚資料を所蔵しています。

① nünü DISCOVERY

図書館の所蔵だけでなく、データベース等もまとめて検索できる便利なシステムです。いまや紙に印刷されたものだけが図書館で扱う資料ではありません。図書館が提供するさまざまな学術情報（図書、雑誌、データベース、電子ジャーナル、電子ブック、論文等）を一括検索できるツールにより、求める情報を広く容易に入手できます。OPAC からアクセスできます。

② 蔵書検索 OPAC

図書館が所蔵する図書、雑誌、視聴覚資料を検索することができます。電子ジャーナル、電子書籍も含まれます。学外からでも使えるので、家で事前に調べておけば図書館でスムーズに目的の資料にたどりつけます。

③ 電子ジャーナル・電子ブック

電子ジャーナルは、“オンラインジャーナル” “e-Journal (EJ)” ともいいます。一番のメリットは、図書館に足を運ばなくても学内の端末からアクセスして読めることです。開館時間を気にする必要もありません。しかも紙媒体と違い、同時に複数の人が読めます。データベースと相互にリンクされている場合も多くあります。“オープンアクセス” といってインターネット上で無料で閲覧できるものであれば、学外からでも読むことができます。

電子ブックは、“eBook” ともいいます。

図書館では、【EBSCO eBook Collection】【KinoDen】【Maruzen eBook Library】【JapanKnowledge Lib】の4種類が使用できます。なかでも、【EBSCO eBook Collection】は多読用図書や教養書など5,000以上のタイトルを保有しています。図書館 OPAC から検索して読むことができ、個人アカウントを取得すれば学外からでも読むことができます。早いうちに取得してフル活用してください。

④ 電子資料

雑誌に掲載された記事や論文、新聞記事を探す時、それぞれ専用のデータベースを使います。検索してそのまま全文を読むことができるものも数多くあります。辞書・事典のデータベースもあるので、早いうちにデータベースの達人になればレポートや課題をスムーズにこなすことができます。

⑤ MyLibrary Login

NUFS-ID・PW で“MyLibrary” にログインすることによって、貸出図書の延長手続きや図書の予約、自分の貸出履歴や貸出状況の確認などができるほか、いくつかのデータベースも学外から使用できます。“My ブックシェルフ” を使えば、検索した資料情報や、検索条件を保存することができます。レポートや課題の下準備に使えるとても便利な機能です。

お目当ての資料を探すなら図書館HPにアクセス

授業等でたくさん出される課題……「資料を探さないといけないけれど、どうしたらいいんだろう?」と困っていませんか。そんな時は図書館のHPにアクセスしてください。スマホからでも大丈夫!

おまけに、VPN 接続サービスを利用すれば、学内利用と同じように利用することができます。1年生から使いこなして、“情報の達人”を目指しましょう!

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館

Nagoya University of Foreign Studies &
Nagoya University of Arts and Sciences Library

English

Q このサイト内を検索

利用案内	データベース	図書館活用ナビ	申請書類	開館時間カレンダー
------	--------	---------	------	-----------

①

nūnū DISCOVERY

②

蔵書検索OPAC

③

電子ジャーナル・電子ブック

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学の所蔵資料・データベース・電子ジャーナル・電子ブックをはじめ図書館内外の文献を幅広く探せます。

検索ワード

Q

④

電子資料

各データベース等から文献を探す

⑤

MyLibrary

貸出状況確認、延長、予約等がパソコンやスマホで行えます

遠隔授業支援

図書館資料
郵送貸出サービス

図書館では、さまざまなサービスを提供しています。

詳しくは、右の QR コードから HP にアクセスして是非確認してみてくださいね。



図書館キャラクター トリイ

また会いましょう

新型コロナもずいぶんと落ち着き、以前の生活に戻ってきました。でも、長い自粛生活のあいだに、「以前の生活」がどういふものだったか、思い出せなくなってきています。外に出て活動的にならなくては、と思ったりもするのですが、そもそも自分がそんなに活動的だったのかどうか。でも、これからはきっと、新しい出会いの機会が増えてくるに違いありません。

『PIAZZA』は、名古屋外国語大学の1年生に向けて、毎年発行している小冊子です。今号の特集は、「長編小説と出会う」。長編小説は一気に読めるものではなく、1作品にかなりの時間がかかります。さまざまな作中人物や世界観に出会いながら、別の世界を生きることができる贅沢な時間です。小説なんて年を取ってからでも読めるのですが、若い時のほうが感受性も強く、小説の世界に入り込む勢いが強いのではないのでしょうか。この機会にぜひ、長編小説を手にとって、少しずつでもいいから読んでいきませんか。本はいつでも待っていてくれます。

(K.K.)

名古屋外国語大学出版会

会長	亀山郁夫（学長）
副会長	恒川孝司（副学長・名古屋芸大副学長・法人事務局長）
編集長	大岩昌子（外国語学部フランス語学科教授）
副編集長	甲斐清高（外国語学部英語学科教授）
編集長補佐	原慎之介（現代国際学部グローバルビジネス学科講師）
編集主任	金関ふき子
編集委員	石田聖子（世界教養学部世界教養学科准教授） 吉見かおる（現代国際学部現代英語学科准教授）
事務局	後藤隆文（大学事務局長） 福壽佳音（大学事務局職員）

表紙 近藤菜摘

協力 名古屋外国語大学・名古屋芸大大学図書館

『PIAZZA』は名古屋外国語大学出版会が、2016年度より発行している冊子です。今回の特集は「長編小説と出会う」。実は自分自身、長編小説に挑んだことは数少ない。自分の人生や考え方を大きく変えるような物語に出会えたらいいと思う。学生の皆さんにとっても、今号がそんな“長編小説と出会う”きっかけになることを願っております。お忙しいなか製作にご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

（出版会事務局）

PIAZZA [ピアッツァ] 2023 年秋号（第8号）

発行日 令和5年9月1日

発行者 亀山郁夫

編集人 大岩昌子

発行 名古屋外国語大学出版会 Nagoya University of Foreign Studies Press

470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57番地

<https://nufs-up.jp/> 電話 0561-74-1111

印刷 株式会社荒川印刷

<世界教養>の知のひろばへ

本大学の書店、またはお近くの書店でお求めください。

Artes MUNDI 叢書



世界文学の小宇宙 ③
詩集
愛、もしくは別れの夜に
亀山郁夫
エリス俊子 編
2860円(税込)



世界文学の小宇宙 ②
囚われて
沼野充義
藤井省三 編
2420円(税込)



世界は映画で
できている
石田聖子 編
白井史人 編
2200円(税込)



世界文学の小宇宙 ①
欧米・ロシア編
悪魔にもらった眼鏡
亀山郁夫
野谷文昭 編訳
2200円(税込)



世界が終わる
夢を見る
亀山郁夫 著
1650円(税込)

新書

学術図書



世界教養72のレシビ
名古屋外国語大学 編
1320円(税込)



フォークナー
語りの力
その創造性の起源へ
梅垣昌子 著
4950円(税込)



ドストエフスキー
表象とカストロフィ
亀山郁夫
望月哲男
番場 俊
甲斐清高 編
3300円(税込)



言語の構造
一人間の言葉と
動物のコトバ
川原功司 著
6930円(税込)



魯迅
後期試探
中井政喜 著
7150円(税込)



食と文化の世界地図
佐原秋生・大岩昌子 著
1320円(税込)

 **名古屋外国語大学出版会**
Nagoya University of Foreign Studies Press

〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57番地
TEL 0561-74-1111 FAX 0561-75-1723
<https://nufs-up.jp/>

<世界教養>の知のひろばへ

本大学の書店、またはお近くの書店でお求めください。

NUFS WORKS



ネム船長の哲学航海記Ⅱ
はじめての比較宗教学
なぜ「今日はツイている」のか
根無一信 著
名古屋外大ワークス 8
2200 円 (税込)



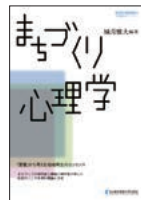
ネム船長の哲学航海記Ⅰ
ソクラテスからの質問
「価値は人それぞれ」でいいのか
根無一信 著
名古屋外大ワークス 7
1760 円 (税込)



現代ヨルダン・レポート
アラブの女性たちが語る
慣習・貧困・難民
佐藤都喜子 著
名古屋外大ワークス 6
2200 円 (税込)



牧畜を人文学する
シンジルト
地田徹朗 編著
名古屋外大ワークス 5
2200 円 (税込)



まちづくり心理学
城月雅大 編著
名古屋外大ワークス 4
1870 円 (税込)



アボリジニであること
濱嶋 聡 著
名古屋外大ワークス 3
1320 円 (税込)



留学と日本人
濱丹羽健夫 著
名古屋外大ワークス 2
880 円 (税込)



サミットがわかれば世界が読める
高瀬淳一 著
名古屋外大ワークス 1
814 円 (税込)

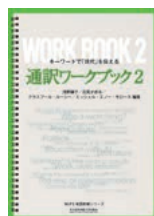
NUFS 英語教育シリーズ



英語コアカリキュラム対応
英語の諸相
ー音声・歴史・現状ー
川原功司 著
1320 円 (税込)



世界のトピックで学ぶ
通訳ワークブック
浅野輝子
吉見かおる 編著
2750 円 (税込)



キーワードで「現代」を伝える
通訳ワークブック 2
浅野輝子
吉見かおる 編著
2420 円 (税込)



英語が好きな子供を育てる
魔法のタスク
～小学校英語のために～
佐藤一嘉
矢後智子 編著
2750 円 (税込)



協同学習で物語を読む
新しい授業のために
新居明子 著
1430 円 (税込)

 **名古屋外国語大学出版会**
Nagoya University of Foreign Studies Press

〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57番地

TEL 0561-74-1111 FAX 0561-75-1723

<https://nufs-up.jp/>

教科書・参考書



アフターハイスクール
日本の中心で出会う多文化・多言語
名古屋外国語大学
出版会 編
1430 円 (税込)



アカデミックスキル
真田郷史
長谷川暁人 著
1100 円 (税込)



**第二外国語で学ぶ
アラビア語入門**
松山洋平 著
3080 円 (税込)



学びの技法
地域を読み、世界を拓く 10 章
現代国際学部
国際教養学科 編
1100 円 (税込)



**POWER-UP
DIALOGUE
I**
1100 円
(税込)



**CORE
ENGLISH**
1870 円
(税込)



Engage
1980 円
(税込)



**Thinking
about
Japan**
1760 円
(税込)



**POWER-UP
DIALOGUE
II**
1100 円
(税込)



**Core
English
Workbook**
880 円
(税込)



**Thinking
about
Culture**
1760 円
(税込)

はじめの1000語シリーズ



**スペイン語
はじめの1000語**
1100 円 (税込)



**アラビア語
はじめの1000語**
1100 円 (税込)



**フランス語
はじめの1000語**
1100 円 (税込)



**中国語
はじめの1000語**
1100 円 (税込)



**イタリア語
はじめの1000語**
1100 円 (税込)

 **名古屋外国語大学出版会**
Nagoya University of Foreign Studies Press

〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57番地
TEL 0561-74-1111 FAX 0561-75-1723
<https://nufs-up.jp/>

PIZZA

[ピザ] 2023年秋号 (vol.8)

2023年9月1日発行 企画・編集・発行：名古屋外国語大学出版会



9784908523397

ISBN 978-4-908523-39-7

C9402 ¥100E



1929402001004

定価：110 円（本体 100 円＋税 10%）



まだ見つからない君へ贈る……。